

西宮 まちたび まんによう

万葉集の足跡を訪ねて巡る



『万葉集』は、今から千三百年ほど前の日本最古の和歌集で、四千五百十六首の歌が、二十の巻に分けて編集されています。万葉人は都から山陽道をたどり、また難波の港から海路を、大宰府・西海道に行き来しました。この西宮も貴重な交通路にあたり、故地として集の中九首の歌が詠まれています。

海少女 漁り焚く火の おばほしく
角の松原 思ほゆるかも

朝じらき 潽ぎ出で来れば 武庫の浦の
潮干の鴻に 鶴が声すも

■現代訳
朝早く港を漕ぎ出でて来る、武庫の海辺の干潟で鶴の鳴く声がしている。
■解説
わが妻に猪名野は見せた。名次山や角の松原はいつになつたら、見せてやれるだろうか。

■現代訳
阪急苦楽園駅の東方の二三「池のほとりに、名次(ナツギ)神社があるが、古代は清音で「ナスキ」と読んでいます。このあたりから広田・神社にかけての丘陵が「名次山」と称されています。「角の松原」の入江は、この丘陵の下まで湾入してたらしく、この高台は、海岸線までも見渡せる景勝の地であつたと思われます。高市黒人は、「万葉集」に旅の歌ばかり18首残しているが、この歌にも複数の地名が出てくるように、地名は29も詠んでいます。見知らぬ土地への憧れや、旅の寂寥感などを詠いあげる、柿本人麻呂と同時代の歌人です。

■現代訳
海人の娘たちが焚く、いさり火のように、ぼんやりと角の松原が見える。
■解説
「角の松原」の「角」は、津門の海岸の「津門」説や、海が湾入して突き出た地形を「角」としたとえた説、「津の野」という語源説など、特定はできないが、西宮市松原町の松原神社付近が故地とされています。津門神社は、務古の水門跡「と伝えられている」。角の松原は、白砂青松の景勝地として、往還の人たちのうわさに違ひぬ憧れの土地だったのでしょうか。

